

中国四国歴史学地理学協会

【考古学部会】（オンライン開催）

日 時 2021年6月27日（日）

9：30 開 会

- 9：40-10：05 1. 長者スクモ塚第1号古墳第5次調査について
宇野真太郎（広島大学文学部・学部生）
- 10：05-10：30 2. 西条盆地における古墳と集落の空間的關係についての一考察
—長者スクモ塚古墳群・三ッ城古墳を中心に—
森木 琉（広島大学文学部・学部生）
- 10：30-10：55 3. 西条盆地における前・中期古墳の墳丘構築方法の検討
竹田千紘（広島大学文学部・学部生）
- 10：55-11：20 4. 古墳時代前・中期における安芸地方の埴輪について
小出来恒平（広島大学文学部・学部生）
- 11：20-11：30 休 憩
- 11：30-11：55 5. 県史跡松本古墳の発掘調査報告
江草由梨（福山市経済環境局文化観光振興部）
- 11：55-12：20 6. 製作技術からみた「神谷川式土器」の編年的研究
—鉢形土器・高坏形土器の分析を中心として—
井島大地（広島大学文学部・学部生）
- 12：20-12：45 7. 月崎下層式土器の再評価
今福拓哉（島根県埋蔵文化財調査センター）
- 12：45-13：10 8. 考古学における測量技術と記録保存の将来を考察する

－ 3Dモデリングの現状について－

R A C C A R M E N (エバーハルト・カール大学テュービンゲン・大学院生)

1. 長者スクモ塚第1号古墳第5次調査について

宇野真太郎（広島大学文学部・学部生）

広島大学考古学研究室では近年、東広島市西条盆地における有力古墳の動態について調査研究をおこなっており、当地域における有力古墳のひとつとされている長者スクモ塚第1号古墳は2016年度に測量調査（第1次調査）をおこなった。その後、2020年度に発掘調査（第5次調査）を夏季と春季に分けておこなった。第5次調査では、前方部端とくびれ部付近の構造の確認を目的とし、第1次調査での成果をもとにトレンチ設定をおこなった。

調査の結果、前方部端に関しては第1次調査で復元された墳丘復元図を追認する形で前方部端と想定された地点で墳丘盛土の落ち込みを確認することができた。くびれ部付近では墳丘上ではなく、墳丘の外側に埴輪を据え、礫を配置していたことが判明した。本発表では、調査の概要とその成果について報告し、表採・出土埴輪片などから本古墳の築造時期に関する考察をおこなう。

2. 西条盆地における古墳と集落の空間的關係についての一考察

－長者スクモ塚古墳群・三ッ城古墳を中心に－

森木 琉（広島大学文学部・学部生）

東広島市の中心となる西条盆地では、ニュータウン建設や大学町としての拡大を通して多くの発掘調査成果が報告されている。その一方で「集落遺跡群と古墳」といった集団と彼らの構築した構造物に対する認識に関わる考察は少ない。本発表では、①古墳立地の面から古墳築造の背景、および②集落と古墳の空間的關係から築造主体の古墳認識、の2つの論点について長者スクモ塚古墳群と三ッ城古墳を中心に「古墳の可視範囲」を軸として考察する。

カシミール3Dを使用して両古墳と周辺集落双方の可視範囲を確認した結果、長者スクモ塚古墳群と三ッ城古墳はそれぞれ南北の異なる方向を意識した地域ネットワーク上のセクターとしての役割を背景に築造されたことが推察された。周辺集落との比高差に着目すると、弥生時代墳墓立地と類似した「丘陵」型の立地をとることから生活空間に近接する一種「身近」なものとして古墳を認識していた可能性も指摘することができる。

3. 西条盆地における前・中期古墳の墳丘構築方法の検討

竹田 千 紘（広島大学文学部・学部生）

東広島市西条盆地における首長墓については、これまでの広島大学考古学研究室の発掘調査によって、複数の箱形石棺が配置される共通性が明らかとなってきた。しかし、古墳墳丘の構築

方法については比較検討がいまだなされてはいない。このため、考古学研究室の近年の調査事例を含め、西条盆地周辺における首長墓の墳丘構造の比較をおこなう。

まず、考古学研究室が調査を行ってきた西高屋町千人塚古墳と西条町長者スクモ塚第2号古墳の土層断面図から墳丘構築技術の具体的な検討をおこなう。加えて2020年度から調査を開始した長者スクモ塚第1号古墳や、これまで調査成果が明らかとなっている高屋町原の谷古墳、西条町三ツ城古墳群などにおける墳丘構築方法を検討材料とし、西日本型の墳丘構築方法の導入やその変遷の過程を復元していきたい。

4. 古墳時代前・中期における安芸地方の埴輪について

小 出 来 恒 平 (広島大学文学部・学部生)

安芸地方においては、古墳の発掘調査事例は少なくはないものの、埴輪調査研究事例が乏しく、埴輪研究が進展しているとは言い難い。しかし当地方最大級の規模を誇る三ツ城第1号古墳では、円筒埴輪のみならず蓋形埴輪や家形埴輪など、豊富な器種及び数量が配置されていたことが明らかになっている。近年、古墳時代前期に遡ることが判明した安芸高田市甲立第1号古墳でも大型の家形埴輪などが出土した。

さらには近年広島大学考古学研究室が行ってきた東広島市長者スクモ塚第1号古墳の調査において、前期の所産と考えられる埴輪が見つかった。これとともに、広島市池の内第2号古墳出土埴輪が当該地域の編年構築に有効な属性を持つことが判明してきている。そこで本発表では、これらの古墳の出土埴輪を中心に、安芸地方における前・中期古墳出土埴輪の年代を考察する。

5. 県史跡松本古墳の発掘調査報告

江 草 由 梨 (福山市経済環境局文化観光振興部)

松本古墳は福山市神村町に所在し、沼隈半島の西側に湾入する松永湾を望む緩やかな丘陵の先端部に築造されている。これまで当古墳は直径約45mの円墳あるいは北側に造出部をもつ帆立貝式古墳の可能性が示唆されていた。近年、当古墳周辺で各種開発事業による宅地化が進み、削平・改変がなされたことから、古墳の範囲を確定するとともに適切な保存対策を講じるために2014(平成26)年度以降継続して当古墳の周辺地域の発掘調査を実施している。

調査から、墳丘の裾と考えられる傾斜変換点が墳丘周囲を円弧状に巡っていることが確認できた。墳丘南東部において、墳裾にあたる葺石が検出されたことから古墳築造時の墳丘は直径約65mに復元できることが明らかとなった。さらには、墳丘南部に南南西方向で南に傾斜する埴輪列や、南西部に造出部を確認した。出土遺物の埴輪片は概ね5世紀代のもので家形・盾形等の器財形埴輪も確認された。

6. 製作技術からみた「神谷川式土器」の編年的研究

－鉢形土器・高坏形土器の分析を中心として－

井 島 大 地（広島大学文学部・学部生）

「神谷川式土器」とは備後南部地域の弥生時代後期の標識とされる土器型式である。胴部に強い屈曲を持つ算盤玉形鉢や壺の存在など、これまで備中地域と類似しながらも備後南部地域に独特の地域性を示す土器型式と認識されてきた。しかしながらこの土器型式の標識とされた神谷川遺跡出土資料はその大部分が未だ公表されていないなど、「神谷川式土器」の研究は十分に進んでいるとは言い難く、編年的研究についてもその製作技術の変遷にまで詳細に検討した研究は見受けられない。

そのため、本報告では広島大学考古学研究室に所蔵・保管されている神谷川遺跡出土の鉢形土器ならびに高坏形土器を対象として製作技術の特徴から類型化し、細分型式を設定して、その変遷を明らかにする。また、第Ⅴ様式における「神谷川式土器」の編年的位置付けについても考察を加えていきたい。

7. 月崎下層式土器の再評価

今 福 拓 哉（島根県埋蔵文化財調査センター）

月崎下層式土器は刺突文および押引刺突文を特徴とし、条痕調整の著しい縄文時代前期後葉の土器型式である。山陰地方や西部瀬戸内を中心として一定程度の拡がりをも有し、里木Ⅰ式に先行する土器型式と認識されている。しかし、縄文調整を施す里木Ⅰ式と条痕調整を施す月崎下層式という異なる系統の土器型式が層位的に完全に分離する出土事例はなく、他方、里木Ⅰ式に後続する大歳山式との共伴事例も存在する。このことから、縄文調整を施す土器型式と時系列的な編年関係をもつとは言い難い。

さらに、器形や器壁、施文にバリエーションも認められ、分類が可能な状況である。以上の課題に即し、本発表では諸属性の整理を踏まえた分類を実施し、他型式との共伴関係を層位事例から確認した。その結果、月崎下層式が九州や近畿・中部瀬戸内の土器型式の分布境界地域である山陰および西部瀬戸内において、想定よりも長い存続幅を有した土器型式であることが判明した。

8. 考古学における測量技術と記録保存の将来を考察する

－3Dモデリングの現状について－

さまざまな技術進歩に伴い、多くの科学分野において新しい研究方法や技術が生まれている。考古学もまた、新しい技術の恩恵を受けており、それらが利用されることが多くなってきた。その一つにフォトグラメトリーと呼ばれる技術がある。欧米ではすでに従来の伝統的な調査方法を補完するだけでなく、このフォトグラメトリーによる検出遺構の記録作成に置き換わった調査事例も少なくない。幾何学的な構造や複雑なテクスチャーを記録、評価するにあたって、従来の方法では数日から数週間かかっていた作業が短時間で済み、装備のコストも抑えられることとなる。

本発表では、2020年度の長者スクモ塚1号古墳のh調査区の発掘と他の発掘調査でのモデル例を基に、画像取得から最終的な3Dモデルの計算までの一連のプロセスを紹介し、その課題を指摘する。また、考古学における3Dモデルの活用の可能性を考察するとともに、さらなる応用研究の可能性を模索する。